

短期大学生の職業意識の変化-ブライダル専門学生と 司書課程学生の比較研究-(第二報)

木内 公一郎

Kinai Koichiro

増田 榮美

Masuda Emi

第1章 概要

この論考は「短期大学生の職業意識の変化-ブライダル専門学生と司書課程学生の比較研究-(第一報)」¹⁾の続編である。

この研究では短期大学生の職業的社会化をGTA(グラウンデッドセオリーアプローチ)を用いて継続的に分析している。本学総合文化学科の学生のうちブライダルコーディネーター、図書館司書を目指す学生にインタビュー調査を行い、傾向をまとめた。第一報では以下のような結論となっている。

(1) ブライダル

ブライダルではインターンシップでいざ現場に出てみると、仕事の難しさ、厳しさを身にしみて感じ、価値や態度を取り入れるのではなく、諦めにつながっている。ブライダルコーディネーターを諦めはするものの、同じブライダル産業の中の他の職種にも視野を広げて考えるようになっている。このことから、今後はいかに授業を通して、仕事観を養わせるかが課題である。

もうひとつブライダルの学生に特徴的なのは、就職活動による視野の拡大である。就職活動により自己分析が進み、自分にとっての向き不向きが理解できるようになったのが理由の一つであるが、一方で、ブライダルコーディネーターの求人が少ないことによる就職難が影響して、視野を広げざるを得ないのも現状である。

(2) 司書

司書の学生は正規の授業が視野の拡大をもたらしているものの、司書という仕事の価値や必要とされる態度への理解や内面化が具体的に進んでいない。

インターンシップや実習も影響を与えていると思われるが、授業の情報量が圧倒的に多く、知識の整理が追いついていない。しかし、一連の活動から学んだことを司書という仕事の価値や態度と結びつけて内面化するにはまだ至っていない。

第2章 分析

第1節 司書

(1) 調査および研究手法

第一報と同様に半構造化インタビューを本学総合文化学科学生2名(2年生)に対して実施した。質問項目としてはそれぞれの職業に対する意識について、授業、アルバイト、実習、就職活動、サークル活動などの側面から質問をした。

インタビューは1回目の4名から2名を選出した。時期は2011年8月下旬に実施した。インタビュー時間は30から40分である。インタビューするにあたり、学生の許可を得た上で録音し、その内容Microsoft Wordで書きおこした。さらに質的研究ソフト「MAXQDA」にデータをインポートし、分析を行った。

(2) 分析

1. 司書として期待される行動と内面

「資料を知る。人を知る。人と資料を結びつける」。これは司書の基本的な心持ちと態度を表現した文章である。コーディネーターとして、ナビゲーターとして、資料と人に関わって行くことが求められる。資料は選定・整理・利用・保存という側面から関わり、様々な資料の特性を理解する。同時に資料の背景となっている教養・知識も必要である。

人への理解はセグメント化された利用者グループのニーズを知ることである。そして利用者は現在の利用者だけでなく、潜在的な利用者、次世代の利用者も視野に入れる。資料と人を結びつけるために読書推進活動(読み聞かせ、お話し会)、レファレンスサービス、読書相談サービスがある。また図書館のステークホルダー(利害関係者)とのコミュニケーションを積極的に行うことも求められる。そして将来に向けて業務・サービスを改善していくために広い視野が必要である。

2. カテゴリ分析

インタビュー記録をコーディングし、カテゴリにまとめたものが表1である。

1) カテゴリ:「クライアントとの関わり」

2名のインタビューは2年生の4月以降毎月一回読み聞かせボランティア活動している。これは上田情報ライブラリーに来館する親子を対象にしているもので、図書館サークル活動の一環である。また5月から6月にかけて中学校で教育実習(4週間)を経験して来ている。そのため、クライアント(利用者、生徒)とのコミュニケーションの印象が強く残っており、インタビューでもそれがはっきり出ている。特に読み聞かせでは幼児、教育実習では中学生と関わり、異なる世代とのコミュニケーションに腐心していることがわかった。「伝わっていることはつたわっているように思えるのですが、なんか顔みると、うーんと本当に伝わっているのか、本当に楽しんでもらえているのかのかなとか。子どものほうが顔に出てくるので」。しかし、試行錯誤のなかで少しずつコミュニケーション技術を習得し、自信をつけている。図書館司書は様々な世代と関わり、コミュニケーションを行う。そのような面でボランティアと教育実習

は学生を成長させる良い機会となっている。

2) カテゴリ:「人と本を結びつける仕事」「学校図書館の現在と過去の比較」

「人と本を結びつける仕事」というカテゴリは前回のインタビューでも抽出されており、司書を自分の職業として考えるきっかけとなった主要因である。今回の分析ではカテゴリ「学校図書館の現在と過去の比較」との関連性が見られた。教育実習では図書館教育や図書館活動を見ている。特に読書活動への強い関心が見られたことが特徴である。コードにあるように学生が中学生だった頃の読書活動と比較しながら、その違いと昔に比較して進歩していることに強い関心をもっている。それは次の発言に表れている。「自分が在学していたときは本を読む人というのは限られた人というイメージがあったのですが、たまたま読書旬間中に行ったというのがあって、うちの学校が朝読書の時間が水曜日以外とられているのですが図書館員お勧めの本を紹介しているんですね。図書館員、じゃなくて図書委員の名前もあって、そのせいか自分のクラスの友達とかなかい子が読んだ本とかは興味もつらしくて、全員が図書館から本を借りてきて読んでいて、それもシリーズものを読んでいたのですね。なんか変わったなというか。」最初から読書推進活動に対する問題意識をもって、教育実習に臨んでいたのであろう。受け身ではなく、普段から読書活動推進のヒントを探索しているので、上記のような発言につながったのだと言える。それとともに改善していきたいという意欲が伺える。職業的社会化が2011年3月(最初のインタビュー収録時)から6月の短い期間に一挙に進展したと言えるであろう。このことは単に実習に参加した結果というよりはボランティア活動や図書館サークル活動で培われた問題意識があって、初めてもたらされたのだと言える。

3) カテゴリ:「図書館の問題意識」

問題意識は現在の図書館のあり方への疑問を提示している。例えば上田地域図書館情報ネットワークの書誌データの間違い、矛盾の指摘という点に表れている。また実習中学校における学校司書の遠慮がちな対応への疑問など現在の図書館界の抱える問題点の指摘という形で表れている。これは「人と本を結びつける仕事」という司書の本質を理解し、その基準に基づいて評価していると思われる。

4) カテゴリ:「2年生として自覚」

1年次に立ち上げた図書館サークルも1年生が8名入部し、1年生との関係や引き継ぎを強く意識するようになって来ている。「人数が増えて、去年みたいにフレンドリーにマイペースにできなくなったというのが少し大きいですね。2年生も私たちが先輩としての意識が出てきて、自分たちで立ち上げたサークルをどんなふうに一年生に引き継いでというのがそこが難しくって、どうしよう?すべてどうしよう?感じになっちゃって」また、1年生とのコミュニケーションにも悩みが見られる。「実習前は1回しかできなかったのですが、お茶会やったときも1年生緊張していて、話できなかったのですが、2年生は2年生でどう接していいかわからなくて、自分たちも先輩いなかったせいでばたばたとした感じだったのですが」と語っているが、徐々に円滑なコミュニケーションをとるようになって来ているようである。

5) カテゴリ：「間近に迫る社会」

様々な経験を積み重ねている学生だが、学生と社会人との落差を実感することもある。Aさんはホームヘルパー2級の資格を取るために専門学校に通っている。そして受講者の大部分は社会人である。「皆さん社会人なので、すごい答えがしっかりして、具体的で、短大のなかじゃあんまり聞かない。私は学生で社会経験していないということを何を言われるわけではなく、突きつけられるので」と語っている。

またキャリアコンサルタントとのカウンセリングのなかで「何をやりたいと聞かれるじゃないですか、『何々がやりたい、どうして、どうして』こっちが考えていなかったことを聞いてもらってわかるというのは当然あるんですけど、途中でだんだん自分がわからなくなってくるといふときもあるので、ときどき、心の相談室にいったほうがわかるんじゃないかと思うことがときどきあるんですけど」と語り、キャリアコンサルタントの突っ込みに答えることができずに困惑している。これは職業的社会化を促されているのだが、対応に苦慮していることがわかる。この発言からわかることは学生としての経験・学習と社会人になるということがまだ完全に一致していないことを表している。

6) カテゴリ：「授業高度化への対応」

1年次の経験と学習を経て、授業も講義から課題解決型の学習が増えてくる。そのなかで様々な葛藤や迷いを経験することになる。「2年になって専門的な知識を学ぶことが多くなって、1年の基礎的な授業から上にいく授業が多くなって、ますます学ぼう学ぼうという意識があつて、たまにわからなくなって、友達同士で『ここどうする?』と聞いたりというのいっぱいありました」と語っている。また、ボランティア活動で1年次から読み聞かせを習得しているため、2年次の「児童サービス論」もかなり余裕をもって臨んでいる。例えば他の学生の読み聞かせ技術と自分の技術を比較しているケースである。「山浦先生の授業の前は一年後期は限られた人でしたが、今回は司書ということで多くなったじゃないですか。そのなかで全員読み聞かせをしたんですね。一人3回以上だったんですけど、図書館サークルでもやっていることではあったから、緊張もせず、むしろ他の人よりも半年長いくらいですから、ちょっと大丈夫かなと思っていたんですけど(略)抑揚消して読んでいますんですけど、人によって違うんだなと思います。面白かったです」と語っている。

7) カテゴリ：「自己判断力を鍛える」

2年生になってから、授業の内容が高度になり、自分で考えて結論出す機会が多くなっている。またサークル活動の方向性をめぐり、迷いや困惑が見られる「どうしよう?、すべてのことが、どうしよう?感じになっちゃって」「課題はひとりでやるとこっちの方向に行っているのかなみたいなの、考えとしてはこっちも面白いかもしれないけど、課題としてはずれているよね」と語っており、大人や教員に頼らず自己判断をしようとする姿勢が見られる。これも社会化のプロセスには重要な要素である。このカテゴリは今回初めて発見された。

表 1 カテゴリ・コード表

カテゴリ	コード
授業高度化への対応	仲間との意見交換
	学ぶ意欲の促進
	読み聞かせ技術の広がり
図書館の問題認識	求人が少ない図書館司書
	図書館検索システムの改善
	消極的な学校司書に対する疑問
学校図書館の現在と過去の比較	図書館の教育的な面への認識
	読書活動
	学校図書館の利用認識
	自分が中学生だった時の読書活動
	生徒が関わる読書活動
人と本を結びつける仕事	人と本を結びつける図書館司書
	人と本の関わり方
	人と本が出会う場所
2年生としての自覚	サークル1年生への信頼
	サークルマネジメント
	サークル1年生との関係づくり
	サークルマネジメント
間近に迫る社会	経験実感と試行錯誤
	1年次よりも現実味を帯びた就職試験
	学生と社会人との落差
	就職体験談への関心
	キャリアコンに問い詰められる自分
クライアントとの関わり	利用者への気遣い・配慮
	言語コミュニケーションへの興味

	雰囲気理解するコミュニケーション
	他世代とのコミュニケーション
	伝わり方への漠然とした不安
自己判断力を鍛える	サークル活動における迷いと自己判断
	課題解決への葛藤

第2節 ブライダル

1、調査の概要（ブライダル）

インタビュアーは研究者、インタビューは短期大学の観光・ブライダルフィールドを専攻している2年生で、研究の趣旨を理解し、入学1年後のインタビューの他、ジャーナルの提出、2年生夏休みのインタビューなど研究の協力で同意が得られた4人である。

第1回目の調査は、1年次春休み期間中の平成23年2月～3月にかけてインタビューを行ない、今回は第2回目の調査として夏休み中の8月にインタビューを実施した。就職活動への配慮から、各1回、1人40～50分程度の個人インタビューとなった。

ジャーナルについては、進路への迷いや不安、進路変更など状況が変化した場合、随時メール添付にて送付してもらうこととした。

前回同様、自由意思の尊重など、口頭と書面にて十分に説明した。特に、いつでも辞退が可能であること、協力内容が教育上に影響することは一切ないことなど、倫理的な配慮を行なった。

インタビューの内容は録音することに同意を得て、その後逐語テープ起こしを行ない、本研究の質的データとした。学生のプライバシー保護のため、氏名の明記は避け、アルファベットを用いることとし、内容については希望により削除を行なっている。

2、インタビューの分析

1年生の春休みの時点で習得されていた社会化の要素は、正規カリキュラムである専門課程の授業・インターンシップと正規カリキュラム外であるアルバイト・サークル活動・ボランティアであった。特にブライダル課程の学生はインターンシップにより社会化が進展していた。2年生になり半期が終了した今回の調査では、就職活動が社会化に最も大きく影響していることがわかった。短期大学生は入学後1年も経たない時期より就職活動が始まるため、2年生の前期中、学生に影響を及ぼした要素は授業よりも就職活動であった。しかし、社会化が十分に備わっていないためにそこで直面する課題や問題を対処するには他者からの意見やアドバイスに頼らざるを得ない状況が浮かび上がった。

学生のインタビューをコーディングし、そこから導き出されたカテゴリをまとめたものが表2である。

表 2 カテゴリ・コード表

カテゴリ	コード
ブライダル専門職の職業理解の深化 (仕事の特性)	感謝される喜びとやりがい
	ブライダル専門職の勤務体系
	失敗が許されない仕事(一生に一度という思い)
	学びと仕事の切り離し
学習の深化	ビジネスマナーの習得
	ブライダルコーディネーターに求められる能力の向上 (サークル活動・アルバイトによる社会化)
	学びの中で進んだ自己分析
	将来役立つ知識としての学び
	検定試験に向けての学習意欲
ブライダル専門職の問題認識	求人が少ない中での就職活動
	遅すぎる求人の時期
	勤務体系
就職活動で身近になった社会	不安の中での就職活動
	就職活動で進んだ自己分析
	異業種に求めるブライダル専門職との共通点
	諦めの受容と仕事への期待感 (内定獲得後の気持ちの変化)
環境に影響されやすい短期大学生	キャリアコンサルタントによる進路先操作
	アルバイト経験による成長
	インターンシップによる挫折感
	家庭事情
	サークルのマネジメント
	交友関係
進路指導の課題	進路指導室のイメージと学生間の風評
	キャリアコンサルタントとの関わり
	進路セミナーの在り方

(1) ブライダル専門職の職業理解の深化(仕事の特性)

ブライダル専門職の職業については、専門課程の授業の他、ブライダル研究サークルの活動や就職活動による企業研究によって仕事に対する認識が深まり理解が進んだ。1年次ではインターンシップで将来の自分をイメージできなくなってしまった学生がいたが、2年次では就職活動によって職業理解が進んだ一方、学びと仕事の切り離しが行なわれてしまった。

1) 感謝される喜びとやりがい

仕事として結婚式に携わる人は、「感謝されることが仕事の喜びと感じている人が向いている」ということをインターンシップ先のブライダルコーディネーターを通して理解しており、そこにやりがいと喜びを見出していた。

2年生になると、サークル活動やアルバイトでの体験からも感謝されることへの喜びと、責任を感じながら働くことへのやりがいを感じ、それをブライダルの仕事と重ね合わせていることがわかった。

学生Aはアパレルのアルバイトでの経験から、客と喜びを共有することが楽しくやりがいを感じていると語っている。さらに、客への提案が楽しく、それがブライダルコーディネーターの仕事に通ずると感じていた。

学生Bはブライダル研究会の副サークル長としての体験から皆を束ねることの難しさや苦勞を体験し、「大変だなんて思いますけど、その中で楽しかったりありがたうって言われるとそんな些細なことが喜べるし、なんて幸せなんだろうって思います。責任を持った中で動いたことが喜んでもらえて嬉しい、ブライダルの仕事全般に言えることですよ」とブライダルコーディネーターの仕事と重ね合わせていた。さらに、「ブライダルの仕事って大変だなんて思いますけど、やりがいがあるから大変なんですよ。だから楽しそうだと思いますよ、関わっている人は」と、仕事の苦勞の裏にある喜びややりがいを見出していた。

2) ブライダル専門職の勤務体系

就職活動で企業研究を行なったことで、それまで漠然としていた勤務体系が明らかになった。ブライダル専門職は、大きく分けて、ホテル内の一部門としての勤務と、結婚式のみを専門に取り扱っている施設での勤務が考えられるが、施設によって働き方が大きく異なる場合がある。将来の自分と向き合う中で、勤務体系との折り合いを探る姿が見受けられた。

学生Dは、1年生で行なったインターンシップでも挫折することなく、さらにブライダルコーディネーターへの希望を膨らませていたが、就職面接会で説明を受ける中で自信をなくしてしまった。「ブライダル施設もホテル関係も、フロントとかサービスとかいろいろなところを回り回って、ある程度経験してからそういう位置に就けるみたいなのかなと思うと、『うーん?』って感じ。それに就くまでに何年かかるんだろうっていう計算的な問題で、どうだろうなと思います」と語っていた。さらに、「仕事で土日がつぶれるとか、そんな定時で終わるような仕事でもないじゃないですか、何時から何時までって決まっているわけでもないし、そういうのを

考えると」というように、ワークライフバランスがとり難い職業であるという認識を持ったようである。

3) 失敗が許されない仕事 (一生に一度という思い)

授業の中で、結婚式に携わる者の心得として、「一生に一度という思いがあるからこそ失敗が許されない仕事」であることを伝えているが、インターンシップや就職活動を通して実際に現場にいる姿を想像した時に、失敗することが恐怖となり諦めにつながってしまった。こうした内容は、基本的な仕事論として教授していることであり、就職活動や実践を通して内在化されていると考えられ教育の効果として一定の評価はできるが、恐怖心から断念につながっていることは残念である。

学生 C が「絶対失敗とかできないと思うし、総合的に考えた時にだんだんとちょっと消えつつあったんですよね、ブライダルの職種が。でも、どんな仕事も失敗は許されないんですよね、そうなんですけど、本当に、もう大事じゃないですか、ブライダルって。もし自分が結婚式挙げるときに、絶対、されたくないんですよ、失敗は。本当に一度なんで」と発言しているように、職業としてのブライダルに恐怖心を抱いていることがわかる。また、「本当に人生に一度の瞬間じゃないですか。絶対失敗なんてあり得ないじゃないですか……ブライダル業でかしこまってお客様と接してるというよりは、どっちかって言うと動いてるほうが想像できるって言われたんですよ」と、他者の意見に流され、難しくも憧れの職業に果敢に挑んでいきたいという気持ちから逃げてしまった。

4) 学びと仕事の切り離し

ブライダル課程の授業は一様に楽しいと口にしてしている。ブライダル専門職に必要とされる基礎教育課程は、短期大学進学的第一の目的であり、例え就職に結びつかずとも、検定試験合格を目指すことで結果を残したいと思っているようである。それは、職業理解が進む中での諦めにより仕事から切り離して「自分のため」のブライダル知識として教授内容を内在化しようとしているからであると考えられる。

学生 B は「就職につながらなくても、自分や友達の結婚式で役立ちますしね」と、はっきり学びと仕事の切り離しを行っていた。

学生 C も同様に「今までは、その仕事をしたいからそのための勉強だと思っていたけど、今は逆に、自分の本番っていうか、結婚式とかがある時に備えるっていうか……ブライダル専門職ということについては、今の時点では7割ぐらいはもうあきらめているけれども、自分のために後期はもうちょっとがんばっていかうかなっていうことですね」と発言している。

また、学生 D は「自分が結婚するとかってなったときに、やっぱ役立つ部分もあると思うし、あと楽しいんですよね。ほんととそれで入ったし、この学校に。絶対役立つとは思って……短大入るときに検定は取ろうと思って入ったんで、別にそれが就職に役立つとかは多分ないと思うんですよ、パスガイドなんで。けど、何かしらの資格を持って一応卒業したいんで」と述

べており、短期大学への進学を無駄にしないための教授内容の内在化を「自分のため」に置き換えている様子が窺える。

(2) 学習の深化

2年生になると、専門課程の授業の他、サークル活動やアルバイト、交友関係の広がり、就職活動によって社会参加へのレディネスとしての態度やマナー、ルール¹⁾、コミュニケーションを学習していた。

1) ビジネスマナーの習得

ブライダル専門課程の2年次の授業では、ホスピタリティ産業としての接客やクレーム対応、敬語、テーブルマナーなどの一般的なビジネスマナーを深く掘り下げて学ぶ。1年次の授業に比べより専門的になるが、学生は実践の現場に近い形でイメージできているようで、現実的な知識を得ることができるため、より意欲的になっていた。

このことは、学生Cの「なんか料理のマナーとかも出てくるじゃないですか、フォークとかナイフのテーブルマナー。ああいうのも普通に自分の結婚式にも、友人の行ったときに絶対役立つじゃないですか。なんで絶対覚えとかなきやってなるじゃないですか。なので一般常識としても使える知識なんですよ。基本的にはお客さんとの接し方とかクレームの対応とかってというのはサービス業とか一般的にも使える内容ですよ」という発言からも読み取れる。

学生Aは「マナーとか役に立ちます。お皿の並べ方とかお料理の順番とかのテーブルマナー。自分自身の生活というか、今後のマナーとかっていうことには役には立ちます、難しいけど」と、仕事としてよりも自分に役立つ知識として内在化しているようだ。

また学生Dも「やっぱ働いていて漢字が読めないとか書けないとか、決まり事っていうか、どんな職業に就いても、やっぱり共通するマナーっていうかあるじゃないですか。だから、そういうのを学べたから、無駄だとは思わないですね」と発言している。

2) ブライダルコーディネーターに求められる能力の向上 (サークル活動・アルバイトによる成長の跡)

サークル活動での交友関係はコミュニケーション能力の向上に影響を及ぼしているようだ。特にブライダル研究サークルに所属している学生は、企画や提案、プレゼンテーションを行なう場面が多く、企画力やプレゼンテーション能力、コミュニケーション能力、さらにはアサーティブになることが求められるが、これは、ブライダルコーディネーターに必要な能力とも重

¹⁾ 宮脇美保子他. 4年制大学における看護学生の職業的社会化-3年次の臨地実習における体験に焦点をあてて(第3報). 順天堂大学医療看護学部 医療看護研究 第4巻1号(2008) pp57-63

なる。

学生 B は「人間関係のこととかもあるし、チームワークとか、そういうことはたくさん話しました。一人でサークル長さんだけが突っ走っててもできないみたいな。みんなの力でみたいな。副サークル長もやってみて、大変だなんて思いますけど、その中で楽しかったり……みんなでコミュニケーションを取りながら一つのことをつくるっていうのも、将来役立つと思います」と話しており、サークルを束ねる立場として成長したことを窺わせる。

学生 A は「インターンシップ大変で心が折れたのにコーディネーターできるかと思えたのは、アルバイトを経験して前よりは少し自信がついたからかも、まだ全然ですけど。インターンシップは体力的にきつかったんですけど、バイトのほうは精神的に結構厳しかった、でももっともっと大変な仕事ってたくさんあるし。クリアしたからもっと大変な仕事もできるようになるんじゃないかとか、どこかで思ったりします……もったきちんと自分が接客を極めていくには、もっとこうしなきゃいけない、ああしなきゃいけないって、いつもいろいろと試行錯誤をしなければと思います」と、アルバイトでの接客を通して成長しており、自信を失いかけていたブライダルコーディネーターの仕事を前向きに捉えようとしていた。

3) 学びの中で進んだ自己分析

ブライダル専門職には、ブライダルコーディネーターの他、現場でのサービス、花や衣裳に携わる仕事などさまざまな職種がある。その中で自分に向いている職種を見つけるのは難しいが、学生 A は、専門課程の学びの中から冷静に自己分析を行っていた。

「授業もブライダルの専門職を目指すということに関しての影響はありますね。やはりブライダルのことを学んでいるのはすごい楽しいと思うので。何か色彩のほうが、やはりどうしても関心が持てなくて。何か、はかどらないんですよ。それよりも実際の授業の中でのブライダルの仕事のほうが面白いと思ったし、もうちょっと学んでいきたいと思う。ドレスとかにすごい興味を持ちちゃいましたね、何か。やはりアパレルというところも自分の中にはあるんですかね。衣装とブライダルをうまく結びつけているかもですね。アパレルの仕事をしていく上でも糧になっています。」

4) 将来役立つ知識としての学び

(1)–(4)では、学生は職業理解を深化させた結果、厳しい現実を目の当たりにして仕事と学びの切り離しを行なっていることを述べたが、ただ切り離しているだけではなく、「将来役立つ知識」としての学びとして捉えていることが明らかになった。

学生 A は「新しいこともあるんですけど、先生の話はブライダル以外にもいろいろ学べるものがたくさんあるので」と、ブライダル専門職以外で役に立つ知識として内在化している。

学生 B の「ブライダルの知識はつくじやないですか、お花のものもつきますし、あと、色のコーディネートとか。ほんとに自分の結婚式のときも役に立つと思いますし。就職につながらなくても、自分や友達の結婚式で役立ちますしね」や、学生 C の「これからの専門的な授業、

ブライダル専門的な授業というのは、今後の自分の結婚式に対して役に立てようと。とか、もしですよ、バスガイドのお客さんでそういう婚礼の、これから挙げるとかいう人が来るかもしれないじゃないですか。どこかしら多分役に立つときがあると思うんで、学生Dの「今までは、その仕事をしたいからそのための勉強だと思っていたけど、今は逆に、自分の本番っていうか、結婚式とかがある時に備えるというか……結婚決まった友人に言われた時に、勉強はしているから、こういうふうにしたほうがいいらしいよとか、そういうアドバイスができたんで、自分のためになるなと思うので」という発言から、自分や友人の結婚式に役立つ知識としての学びと捉えていることがわかった。

5) 検定試験に向けての学習意欲

2年生の前期が終了し、異業種への就職が内定している学生が出始めて、専門職への就職を諦めかけている学生もいたが、2年次の最後に実施される検定試験に対してはモチベーションを維持していた。

学生たちは一様に、「資格はほしいです。アシスタントブライダルコーディネーター(以下ABC)検定は絶対ほしいです。もっとどんどんやりたいですね。ブライダルが一番楽しいです、授業の中でいちばん(学生A)」、「モチベーションは落ちてはないですね。後期もブライダルの授業は受けます、受けます。最後までやって、ABC検定取ります。ブライダルの資格だけどモチベーションはつながってます。ほんとに全然落ちてないですよ。ブライダルを勉強したいっていう気持ちは全然(学生B)」、「ABC検定の試験対策も受けます。ただ短大に来て授業を受けて終わりっていうよりは、その授業で受けたこともちゃんとこう活かせるじゃないけど、ちゃんと検定は受けて卒業しよう(学生C)」、「この先もちゃんと半年間、検定試験も取ってというところまではがんばろうという気持ちにはなっています」と話していた。

(3) ブライダル専門職の問題認識

学生はブライダル専門職の職業理解や専門課程の学習が深化し、学内外での体験から人間的に成長して自信にもつながってきた。しかし、ブライダル専門職におけるさまざまな課題が職業選択に影響を及ぼしていた。

1) 求人が少ない中での就職活動

短期大学生に対するブライダル専門職の新卒採用は非常に厳しいのが現状である。ホテルでは採用後直ぐにブライダル部門に配属されることは難しく、また、専門結婚式場では短期大学生の新卒採用が少ない。取り扱う金額が大きい上に、年配者とのコミュニケーションが必要であるため、短期大学卒業直後の年齢では対応が難しいと判断されているようで、ブライダル経験者や既にビジネスマナーを身につけている人に対する中途採用が多い。このように求人が少ないことで、就職活動が円滑に行なわれなかったことが、学生Bの次の発言からわかった。

「そこまで頑張れるのかどうかわからない不安の中でも、なんかたくさん求人があったり、

早い時期にね、そういうものがあつたりしたら動く気にはなつたかもしれないですね。ブライダルは学んできてもすごい大変っていうイメージが大きかつたんですよ。だから、自分も仕事できるのかなって感じで、まだすごい頑張ろうっていう意識がそこまで固まっていなかつたんですよ、4月のときには。でも、もし求人が出たら、頑張れるかわからなくても、チャレンジはしようぐらいでやつたと思うんです」。

2) 遅すぎる求人の時期

ブライダル専門職の求人は少ない上に出てくるのが遅い。就職活動が早期化している昨今、求人が出てくるまで待つには不安が大き過ぎる。このような求人状況から、他の業種に視野を広げて就職活動せざるを得ない状況が浮かび上がった。

学生 B の「就職活動は4月のあたりにまだブライダル系の求人が出てなかつたんですよ、お花とかも。で、なんかその求人が出るのは、夏ごろになると主にいっぱい出てくるからと言われて、私は夏ごろに受けようと思ったんですよ。でも、その夏に急にそういうところにぶつっけで受けたら、面接とか慣れてないとダメだからって言われて、じゃあ、サービス業だったらほかにもいろいろ興味があるからってなって、小売業を受けようと思って初めにスーパーの T にしたんですね。求人が少ない上に出てくるのが遅い、ブライダル業界って。それが影響したかもしれないですね」という発言からその状況が窺える。

学生 C も「諦めてはなかつたですね。だから、なんか花屋とかの募集があれば受けたいなっと思ってたんで。じゃあまずは、花屋さんの募集が今のところはないからっていうことで。あと正社員とかってやっぱ限られるじゃないですか。ほんとになんか、募集も少なくてっていうのがあって、とりあえず受けるだけいろんなところを受けてみようっていう考えでした」と語っている。

さらに学生 D も「ブライダル専門職のコーディネーターという職種に対しての求人がとても少ないっていうのも、やっぱり諦めるきっかけになっちゃってますね。やっぱりそうですね、タウンページとかで、端から電話をかけてみるっていうのも手だよって先生に言われたんですけど、やっぱり何か、かけづらいとか、挫折そうですね……求人出さないですもんね、表にはね。それがやっぱり厳しいですね。就職活動して初めてそういうことってわかつたですね。こんなに少ないとは思わなかつたです」と切実な思いを語っていた。

3) 勤務体系

職業理解が進んだことにより、勤務体系が自分のライフスタイルと合わないと感じた学生もいた。

学生 D は「ブライダルコーディネーターの勤務体系というか、その仕事自身がちょっともう大変っていうイメージになっちゃっているということですね。自分の中では、例えば土日はもう完全に休みじゃないし、定時で上がれないし、子供を育てる環境としてはよくないっていうふうに思ってるんですね」と語っており、長く働いていかれるかどうか自信をなくしているよ

うだった。

(4) 就職活動で身近になった社会

インターンシップや専門課程での学び、サークル活動など、学内外での体験だけでは身近に感じられなかった社会が、就職活動によって現実のものとして受け止められるようになったが、皮肉なことにそれが専門職を諦める結果に結びついてしまった。

1) 不安の中での就職活動

四年制大学の3年生と同じ土俵の上での就職活動は、短期大学生にとっては思いのほか厳しく、不安に満ちたものであり、同時に数社の受験はできないなど余裕のなさが窺える。

学生Bは「二次試験受かってる時点で、花やのNの求人出て、ほんとに受けられたんですよ。でも2つ併願してやるのは始めは怖いなって思って。これで流通Tが落ちたら、次からは2個とか3個一気に受けようと思って。だから、あったんですけど受けなかったんですよ」と語っている。また学生Cも「説明会行ってなくて、1回目と2回目の試験があって、でもなんか心の準備ができてなくて、2回目で受けたいって言ったんですよ……もうしぶしぶ『はい、よし決まり』とか言われて『1回目受けます』って言って」と、準備に時間をかけたいという気持ちから踏ん切りがつかない様子が窺えた。

また学生Bは「受験会場の人とちょっと会話をしたりとかしてて、なんかもう、学歴とかもはるかにそっちのほうですごく。アメリカに留学してる人とか、東京のなんかちょっと有名な大学から来てる人。かたやなんか短大の、普通の、平凡な感じのっていうので、最初はなんかもう絶対落ちたと思ったんですよ。もうほんとに」と周囲と比較して自信を喪失していることがわかった。

2) 就職活動で進んだ自己分析

就職活動によってさまざまな企業を訪問し説明を受ける中で、自己分析が進み、自分に向いている職種が明確になったようだ。

学生Bは「個別の説明会を聞いていくうちに、自分のことがわかったっていうことですね。聞いてみると、自分に対してはここは合う、合わないっていうことがわかってきて、だから、他のいろんなところ別に受けなくても聞けばわかりました。こういう体質が自分には合うっていうことがわかって、自分自身がわかったっていうことですね。就職活動して、自己分析をして……就職活動が役に立った。でも、自分を見つめ直せたというのは大きいですよ。なんか自分がこういうことがしたいとか、こういう長所があるからこういうところに向いてるとか、自分がわかってなかったら仕事も選べないわけじゃないですか」と語っており、自己分析を進めるのに効果的なのは、授業や学内外での活動ではなく就職活動であることがわかった。

学生Cも「ブライダルコーディネーターにしても、お花屋さんにしてもそうですけど、ブライダルのお花をするにはお客さんとの打ち合わせもいろいろ必要だし、お客さんと接する期間

は長い。そういう、いろんな、一人のお客さんとずっと長く接していけるのがいい、ほんとはいいんですよ。でも、キャリコンの先生に言われたのが、不向きって言われて、どちらかというとブライダル系は。なんか、あたしすごいミスが多いんですよ、アルバイト先でも。就職活動していて不向きってわかってきて」と、就職活動を通して自分の性格を再認識し、仕事の向き不向きを悟ったようである。

3) 異業種に求めるブライダルとの共通点

異業種に内定後、当初の自分の目的との整合性を保つため、内定先の異業種にブライダル専門職との共通点を見出そうとしていることがわかった。

学生 A はアパレルでの仕事について、「やっぱり、どこかでコーディネーターにもつながってるんですかね、服じゃない接客でも自分の力を試したいというか。アパレルでやったものが違うところでもできたらなとちょっと思い始めて、やはり短大ではブライダルを学んで、ブライダルを学びたくて入ったわけなので、ちょっとその学びを無駄にしたくないというか」と語っており、異業種での仕事とブライダルを重ね合わせ、ブライダルの学びを無駄にはしたくないという気持ちが表れていた。

学生 B は「人と接する仕事がしたいからブライダルだったのか、ブライダルの人と接するというのがサービス業につながったのか。どうなのかわからないけどやっぱり何かあるのかな、延長線上上というのは。そうですね。でも、人を喜ばせる仕事がブライダルにはあって、そこからつながってるって感じですかね。ブライダルだけでなく今度行く仕事もそうかもしれないですね。人とかかわるっていうことはね」と、人と接する仕事としての共通点を見出し、学生 D も「車のディーラー、ショールームっていうのが、その営業の仕方というか接客の仕方は、どこかでブライダルコーディネーターのような働き方みたいですよ。ブライダルコーディネーターも、接客している部分よりも事務処理している方が多いかも。そうですね。それで、いて、話もするわけだし、どこかで、もしかしたらその働き方に魅力を感じたというのは似ているところがあるからなのかもしれないですね」と接客の仕方に魅力を重ねていた。

4) 諦めの受容と仕事への期待感 (内定獲得後の気持ちの変化)

就職活動を通してブライダル専門職への就職が難しいと悟り、内定後厳しい就職活動から逃れるために異業種への就職に進路変更した学生がいたことは非常に残念であるが、就職が内定した学生は、諦めたという挫折感ではなく、気持ちが前向きで、将来の仕事に対する期待感を抱いていることがわかった。

学生 B は当初受験予定だった花屋を諦め流通業に決定したのだが、「花屋の本命を受験するための練習だったけど、真剣に受験して、そうやって自分がすごい入りたいと思った会社だから、入ってから辛いことがいっぱいあっても頑張れるのかなって。ブライダルのこととかお花好きなんですけど、でも、できる限り仕事はずっと続けたいので、ううん・・・働いてみなきゃわからないですけど、今は流通 T で頑張ろうかなって感じですね」と、自分が精一杯努力し、頑張っ

たと思えたことが前向きに捉えることにつながったようである。

学生Cはバスガイドに内定し、「内定受かって、そこに行こうって思えましたね。雑貨屋さんとかって、お客さんとかかわる時間が少ないじゃないですか……でも、バスガイドって、大変なこともすごいいっぱい絶対ある分、その倍楽しさみたいなの。いろんなところにも行けるし、なんだろう、わかります？その倍楽しさが絶対あると思うんですよ。人生でいうと波乱万丈みたいな、バスガイドは。不安はいっぱいです。でも勉強するいい機会にもなるかなって。なんか今まで本当に勉強、嫌いっていうのもあって結構避けてきたんですよ、人生の中で。なので、一度ぐらいはもうびっしり勉強してもいいのかなって思って」と語っており、不安の中にも楽しみを見出している様子が感じられた。

学生Aはアルバイト先のアパレルに内定し期待される中で社員並みに働いており「今はやはり学生だから、あまり入ってないじゃないですか。だから春休みとか夏休みはすごい社員並みに入っていたんですけど、今はちょっと自分駄目だなんていう時でも、考える時間とかちょっと休める時間があるじゃないですか。でも、就職してから自分が折れたとしても仕事はやって来るわけなので、それで自分が折れないか心配なんです、今」と、仕事を通じて不安を感じていたが、これも、真剣に仕事と向き合おうとしているためのジレンマであると考えれば前向きに捉える事ができるであろう。

さらに学生Cは、ブライダル専門職を諦めたことを受容し、その上で真剣に新しい職場でのキャリアデザインをしていた。「頭の中にはもうブライダルというか、装花、お花の方も全くもうなくなっちゃってます。将来的にも。5年はとりあえず勤めて、そうすると手に職が多分持てるって言えると思うんですよ。5年勤めたら多分また復帰はできるって言われて、産休とかもあるんで5年とか勤めて、相手がいればその辺で一回まあちょっと出産をしつつまた復帰しようかなみたいな感じで思ったりとかして。今はバスガイドをもっとちゃんと極めようと思ってます。今はその得た仕事を真剣にこれからちゃんとして受け止めてますね。楽しみに仕事に行くっていうのはすごく重要ですよ。あたしこれすごく楽しみって、5年間は絶対頑張るなんて思いながら。将来にも役立つかなって。一緒に誰かと旅行行ったときに、あ、こねって、ずっと説明できればカッコいいみたいな感じで」。

(5) 環境に影響されやすい短期大学生

1年生は、専門科目や学内外での活動経験だけでは、社会人としての基本的な価値や態度を取り入れるのが精一杯で、ブライダル専門職に必要なより専門的な価値や態度を内面化するのは難しいのが現状である²⁾。2年生になってからのさらに専門的な授業内容を内面化したり、就職活動を通して行なわれる自己分析や職業選択が職業の社会化に影響を及ぼしていると思われるが、加えて、そこに関わる人との交流や環境に大きく影響を受けていることが示唆された。短

2) 木内公一郎他、短期大学生の職業意識の変化 ブライダル専門学生と司書課程学生の比較研究(第1報)、上田女子短期大学 観光文化研究所 所報第9報(2011) pp1-25

期大学は2年間しかなく、自己分析や職業選択に費やす時間が十分に取れないため、他者からの意見やアドバイスに流されやすくそのまま職業の社会化に影響してしまう傾向があることがわかった。これは今回新たに発見されたカテゴリである。

1) キャリアコンサルタントによる進路先操作

学生のインタビューから、職業の社会化に最も影響を及ぼしていたのはキャリアコンサルタントのアドバイスであった。

学生Bは「流通業を薦めてくれたのは、進路指導室のキャリコンの人、Xさんです。すべてXさんでした。きっかけはそこです。初め試験受けるのも、今から受けられるんですか、そんな準備もしてないのに、って感じだったんですけど。『まずは受けなきゃ何も始まらないから』みたいな感じで、Xさんがパソコン持ってきて『早く申し込みして』とか言われて、わかりました、します、みたいな感じで。ほかの小売業も一緒に受けろって言われたんですけど……」と、半強制的に就職試験の申し込みをさせられた状況を語ってくれた。

学生Dも「一番のきっかけは、先生にそういう仕事もあるけどどうっていうふうに言われたっていうか、考えたりはしないの？みたいな感じで、進路室のキャリコンの先生の薦めで。車のディーラーとか一般事務を……でも車屋さんだと、月に1台はみたいな、そういうのがあったらプレッシャーでつぶれちゃうかなと思って。そうしたら先生が、『そんな最初からそんなノルマが絶対あるわけないし、それはそれできつといい経験になるから、今からそんなガチガチになっていたらどこも入れないよ』みたいなこと言われて」と、キャリアコンサルタントの意見に誘導しているかのような状況を窺わせる発言であった。

学生Cについても「最初はキャリコンに通って先生にバスガイド薦められて、なんか最初そこまで乗り気ではなくて……本来の希望は花、ブライダルの、結婚式場の装花とかブーケをつくるとか、本当はそれがやりたかったですね。キャリコンの方に他を薦められるまではそう思っていました。キャリコンの先生に不向きって言われて、どちらかというブライダル系は……バスガイドとか、あと新幹線の車内販売、ああいうほうが多分オレは向いてると思うって言われて、確かにまあわかるんですよ。2年生になってから何が影響したかっていうと、やっぱりキャリアコンサルタントですね。でかいです、本当に。私はXさんですよ。Xさんの言うことってすごいずっしりくるんですよ、なんか言葉が。多分Xさんの影響力が結構私の中で大きかったって思います」と、キャリアコンサルタントの影響力の大きさを示唆する内容であった。

2) アルバイト経験による成長

キャリアコンサルタントに影響されない学生は、もともと自己分析ができており、職業の社会化に影響を与えたものは、アルバイト経験により得られた成長による自信であった。

学生Aはアパレルでのアルバイトで自信が生まれ、「もともと興味を持っていたからアルバイトをしてみた、服は好きだったので。それでアパレルに。まだまだですけど自信ができました、

アルバイトで。素質があるって社長とか店長とかに言われたりするんですけど、それは自分は喜ばないようにしています。それで満足しちゃいけないと思ったりとか。それで喜んでいたら駄目だと思っちゃいます。実際にお客さんに喜んでもらえて初めてっていうことですね。自分が仕事に慣れたとしてもまだできる人はいるし、それはできてないかもしれないし、自己満では終わりたいくないとか」と、アルバイトでの経験を経て、思考錯誤を重ねて接客業を究めていくことにつながった。

3) インターンシップによる挫折感

1年次に経験したインターンシップも、専門職の価値や態度の内面化に大きな影響を及ぼしていた。そこで挫折を経験した学生は、職業選択にも影響があることがわかった。

学生 A は「道が分かれたのはインターンシップですね。だから経験しなかったらブライダルへ行っちゃってたかもですね。インターンシップで結婚式場に行って、体力的に大変だった。あと、そうですね、これは、自分は幸せを祝ってやれるのかと。何かできるのかなみたいな感じです。きついことが、でも達成感が上回るのか不安になったというか。自分的には向いているのかな、高みを目指せないのかなみたいな感じです。インターンで現実を知って、ちょっと心折れたんです」と、インターンシップの経験が、「将来のなりたい自分」であるのか疑問に思い、職業選択の道が分かれたと語っていた。

学生 C はキャリアコンサルタントにアドバイスされる以前はフラワーコーディネーターを目指していたのだが、「インターンシップでコーディネーターの仕事を見たり、実際にコンシェルジュをやって受付やってみたりして、私はコーディネーターじゃないなってそのとき思いましたね。それはすごくいい経験でした、インターンシップって。そのあと、やっぱり私はお花が好きだからって思い直して」と語っているように、インターンシップによる経験から、本当に自分の好きな仕事を見出すことができていた。

4) 家庭事情

家庭環境も大きな影響を及ぼしていた。

学生 D は、2年生の前期中に母親を亡くし、それが契機となりブライダル専門職を諦めることになってしまった。「軽井沢とかも、家を出るという考えがあれば、まだいくらでもある。もっと素敵なところあるんで、ちょっと就職できるかなと思うんですけど。家をちょっと出れないという条件があることで、ある程度、何て言うんですかね。お兄ちゃんが結婚して出るとなると。お父さん一人になっちゃうんですね。お母さん亡くなっちゃって」と語っており、苦悩が窺える。

5) サークルのマネジメント

2年生になると最上級生としてサークル内での企画や運営を任され、先輩役割も加わり責任のある立場となる。このような経験が就職活動や職業の社会化に影響を与えていることがわかつ

た。

学生 A が「何かまた違ったというか、アパレルとは違う接客も気になってきたんです。アパレルのアルバイトでの接客を経験したからそういうふうには思えたってこともあるけど、今までのブライダル研究会 MIP の活動とかも通して、何かコーディネーターも興味もあるんですけど、やはりヘアメイクも興味が出てきた感じがします。サークルでいろんなショーをやったりとか、作ったりヘアメイクしたり、企画したりっていう中で自分の役割の中で興味が生まれたんですね」と語っているように、サークル活動を通して内定の決まったアパレルとは違うブライダルに通じる接客業に興味が生まれていることがわかる。さらに、「コーディネーターは微妙なところですね。でも企画は楽しいので。企画というか、つくり上げることは楽しいと思ったので。すごくブライダル研究会、サークルの活動というのはいいい刺激になっています。ヘアメイクはもともと興味があったので、そこがまた目覚めてきたということです。あとコーディネーターにも少し」と、就職活動で一度は諦めたブライダルコーディネーターにも再び挑戦してみたいという気持ちが生まれている。

6)交友関係

短期大学生は 2 年生になっても社会化が思うように進んでおらず、高い志や目的意識を持って自ら進んで就職活動を行なうことができないようである。そのため、さまざまな環境に影響を受けやすく、特に身近にいる存在が大きな影響を与えている。

学生 B は、「就職活動は仲間の影響も大きいですね。なんかグループによって変わるって言うじゃないですか。先輩の K さんたちも、K さんが決まってからみんな高まったみたいな感じで、グループ 4 人すぐ受かったとか言ってる。私、去年そういう話を聞いて。私が動き始めたら、O さんとか全然やる気じゃなかったんですけど、『私もやる』とか言い出して、通って、受かって、で M さんも受かって、N さんも受かってみたいな感じ。だから、そういう友達が近くにいればいいんですよね」と、身近にいたサークルの先輩が就職活動している時の会話に影響を受けていることがわかる。学生 B は先輩から影響を受けて就職活動を内面化し、その結果逆に周囲に影響を与えている。また、グループ全体で就職活動をしていなかった先輩たちの失敗経験も見ており、それも反面教師として捉えていた。さらに、「頑張って進路セミナー通って進路室も行って内定出たから、結果出た人の口からみんなに経験談話してって言われて。でもそしたら、進路室に通う友達がふえたんですよ」と、自分の成功談が周囲に影響を与えていることを実感している。

学生 C は、「なんかまだ先のように感じちゃって、多分自分の意識が薄かったと思うんですよ、就職に対しての。でも周りが動き始めれば自分も焦るんで動くんですけど……でも周りもそう思ってたなら、みんながみんな一緒に動かないんですよね。それ怖いですよね。だから周りにいっぱいやってる人がいてよかったんですよ、本当に。そうなんです」と、友人に触発されて就職活動を開始した様子が窺える。

このような状況から、先輩や友人の中にブライダル専門職への就職を目指して意欲的に活動

している人がいたら、影響を受けて挑戦する気持ちが生まれることも考えられるであろう。

(6) 進路指導の課題

ブライダル専門職を目指して専門課程で学んできても、さまざまな障害や影響から途中で諦めているケースが多いことがわかった。中でも、就職活動を始めた時点から深く関わる進路指導室の影響は大きい。学生からの聞き取りから課題が浮かび上がった。

1) 進路指導室のイメージと学生間の風評

学生にとって進路指導室は出入りし難い場所であり、行けば就職活動の内容について説教されると思い込んでいる学生がいる。就職は自分の将来に関わることであり、本来は自ら進んで活動しなければならないはずであるが、身近に迫った社会から目を背け、就職活動の苦しみから逃れようとする学生がいるのも否定できない。このような社会人としての価値や態度を内面化できない学生は、進路指導教員を遠ざけ、就職セミナーにも出席しない状態になる。自分自身の不甲斐なさを認めているからこそ「怒られる」と思い込み、風評へとつながっているようである。

学生 B は進路指導を熱心に受け内定も決まっているが、就職セミナーに出席していない友人について「風評があって、進路セミナー出てないのに進路室へ行くと怒られると思ってますよ。課題のプリントとかも出してないし。初めのころ張り出されたりしてたじゃないですか。進路セミナーあんまり出てなくてみたいな呼び出しみたいな感じで。だから、それでもう、行きたくないみたいな感じで。廊下歩いていると、『ああ、Y 先生だ』みたいな感じで、ちょっと避ける生徒がいるんです」と話している。さらに、「先生たちも、進路セミナー出てないからって、進路室へ行っても『なんで出てないんだ』って怒るわけじゃないし、来たら手を貸して上げるからって言うってみんなに話して。そしたらみんな通うようになりましたね。それで進路室来るようになったら『Y 先生すごいいい先生だね』とかみんな言い出して。だから、みんなだんだん印象はすごよくなってるんじゃないですか」と語っており、勇気を出して進路指導室に入った学生は印象を良くし、その後も活用していることがわかる。

一方で、学生 D は就職セミナーにほとんど出席していなかったが、進路指導室は自分を律するの役に立っていると感じているようである。「進路サポート室に行く、例えばキャリアコンに予約を入れたとしたら、やっぱそれまでに何かこう、多分聞かれるだろうなっていうことを予測して、今はこういうところに興味があってとか、こういう求人を見てとか、そういうのをまとめておいたりとか、この間、前に行った時に、履歴書を完成したのを 1 枚持っておこうねって言われたから、今日書いておこうかなとか、そういうふうに、何て言うか、いい意味で、引き締まるというか……そうですね、やっぱりそれがなかったら全部なあなあになっていると思うんですね」と語っている。

学生間の風評をなくして出入りしやすい環境を整え、進路指導室の利用が自分の将来にいか

に有益であるかを伝えていく工夫が必要であろう。

2) キャリアコンサルタントとの関わり

就職活動においては、身近な人からの影響を受けやすいことが示唆されたが、具体的な就職先についてはキャリアコンサルタントからのアドバイスに左右されることがわかった。それだけにコンサルタントとの相性は大きな問題となる。

学生Dは「何かあったら本当にすぐ行けるので、何て言うんだろう、人にもよりますけど。Xさんにはちょっと、『Xさん』みたいな感じでは行けないんだけど、Z先生には『Zせんせい』みたいな感じで行けるから、行きやすいっていうのはあるんですけど。だから、進路室には行きやすいですね」と語っているのだが、これは相性のいいコンサルタントの存在がなければ相談に行かなかったかもしれないことを示唆している。

学生Cも「キャリアコンサルタントの、合う、合わないありますね。なんだろう、Xさんが一番なんですよ。だから毎回Xさんの日に入れてたんですよ。だからむしろ『次Xさんいつですか、その日に来ます』みたいな」と話しているように、相性の善し悪しが進路指導室の利用状況に影響していることがわかる。さらに「Xさん、逆に合わない人が多いんですか。多分人によるんですかね。そう、私も一番初めは怖いっていうイメージがあったんですよ。言葉遣いが雑って思いました。でも自分が合う人を探すことができたなら、その人とコンサルティングしてもらえればいいですね。みんなと話してみないとわかんないですけど」と語っており、話しやすいコンサルタントの存在が就職活動には有用であることがわかった。

しかし、コンサルタントからのアドバイスが具体的な就職先の決定に大きな影響力を持っているのは少し気にかかるところでもある。思うように職業の社会化が進んでいない学生にとっては、舵取りをしてもらうことで進路決定につながるいい面もあるのだが、根本にある本人の希望を無視してアドバイスをしているケースも少なからずあり危険を孕んでいる。学生自身が納得していない場合は就職試験の受験時や内定決定後に気持ちが揺れ動くことが考えられる。

学生Dは、家庭の事情によりブライダル専門職を一時は諦め、キャリアコンサルタントのアドバイスで一般事務職の就職試験を受けることになったのだが、試験日当日になって受験を断ってしまった。試験日が近くなるにつれ不安になり、ブライダル専門職を諦めきれずにいる自分に気がついたようである。その後家族で話し合っって専門職を目指すことを決め、ブライダルコーディネーターの内定を得ることができた。

キャリアコンサルタントのアドバイスに左右されるケースが多いことを考えると、コンサルタントの能力や質をいかに担保するかは重要な要件である。さらに、アドバイスの内容については細心の注意を払い、学生の希望を十分に汲み取る努力が必要であろう。

3) 就職セミナーの在り方

先にも記したが、職業の社会化ができていない学生にとって就職セミナーへの出席は苦痛である。しかし、ブライダル専門職の少ない求人の内定を勝ち取っていくには、いかに就職セミ

ナーに出席してもらい、試験対策を行なうかが重要である。

学生 B は友人について「みんなは 1 時間ずっと、そういう先生の話さぼうと聞いているのは、つまんないらしいです」と話しており、ただ一方的に講義を受けているセミナーではなく、相互にコミュニケーションがとれるような少人数による講義が望ましいことがわかる。

また、学生 D も「進路セミナーは、何て言うんですかね、先生たちが話すことが一方的というか。やっぱ大勢いるところで疑問に思っても、質問、何かある人って言われても質問しづらいというか……きっと、先生は質問されたらちゃんと答えてくれるとは思いますが、それは私とマンツーマンの時にすればいいだけの話であって、そんなみんなが大勢でいるところでなくてもいいし、私がキャリコンがあった時に聞くとかって感じになっちゃうので。職種によって違うというものに対しては職種ごとにグループ分けとか。何かきっと違うところはあると思うので」と話していることから、大勢で行なう講義よりもキャリアコンサルタントによる面談の方が効果的であり、個人や少人数グループでのセミナーの方が参加しやすいと感じていることがわかる。

一方で、就職セミナーの重要性は理解している。学生 D は「セミナーの中でも全体に対して言えること、例えば履歴書の書き方だとか面接だとか、そういうことについてはとてもいいですね。みんなは多分、電話の仕方講座みたいな時とか履歴書の時とかは、これ大事だから出ようみたいな感じになるんだと思うんですよ」と話している。また、学生 C も「スケジュールで、これはおもしろくないとか、題名を見て決めちゃう……でも尊敬語とか、あれは役に立ちます。絶対就職の試験にも出るし。これからお客さんと話すときにもね。あと手紙の書き方とか。あと履歴書の書き方も必要ですよ……実際の人事の担当者に来てもらうとか、そういうのも役立つと思います」と語っており、実際の就職試験に役立つ実践講座は就職セミナーでの教授により内面化し、個人的に必要な知識や情報を得たり、具体的な就職先を決定したりするのはキャリアコンサルタントによる面談が有用であると考えているようである。

第 3 章 考察

第 1 節 司書

(1) カテゴリ関連図

この図はカテゴリ間の関連を表したものである。カテゴリ：「人と本を結びつける仕事」はコアカテゴリに設定した。その理由は常に学生が考える職業観の中心になっているからである。また、前回のインタビューでも司書を選んだきっかけでもある。それが 2 年生になっても継続している。ボランティア活動やサークル活動はその職業観を強化することになっているようである。そしてその職業観をもって、教育実習に臨んでいる。実習中は学校司書、読書推進活動の様子を粒さに観察していることから明らかである(カテゴリ：「学校図書館の現在と過去の比較」) また実習先の生徒とのコミュニケーションに少し苦勞している様子も見られる。これによって他世代とのコミュニケーション技術を身につけている。(カテゴリ：「クライアントとの

関わり」)

もう一つの流れとしてカテゴリ「自己判断力を鍛える」が見いだされている。

これは専門化・高度化して行く授業に適応しようとしている。その中で様々な葛藤を抱えつつ、課題解決のために頭をフル回転させて判断を下そうとしている。さらにサークル活動では後輩ができたことにより、運営に対する迷いや悩みを見る事ができる。一連の自己判断プロセスは職業的社会化の進展と見る事ができるのかもしれない。

上記2つの流れと接点を見いだせないのが、カテゴリ：「間近に迫る社会」である。学生も社会人になることを意識しているが、完全に成りきれず、中途半端な状態にある。これは学生という身分である以上仕方のないことであるかもしれない。

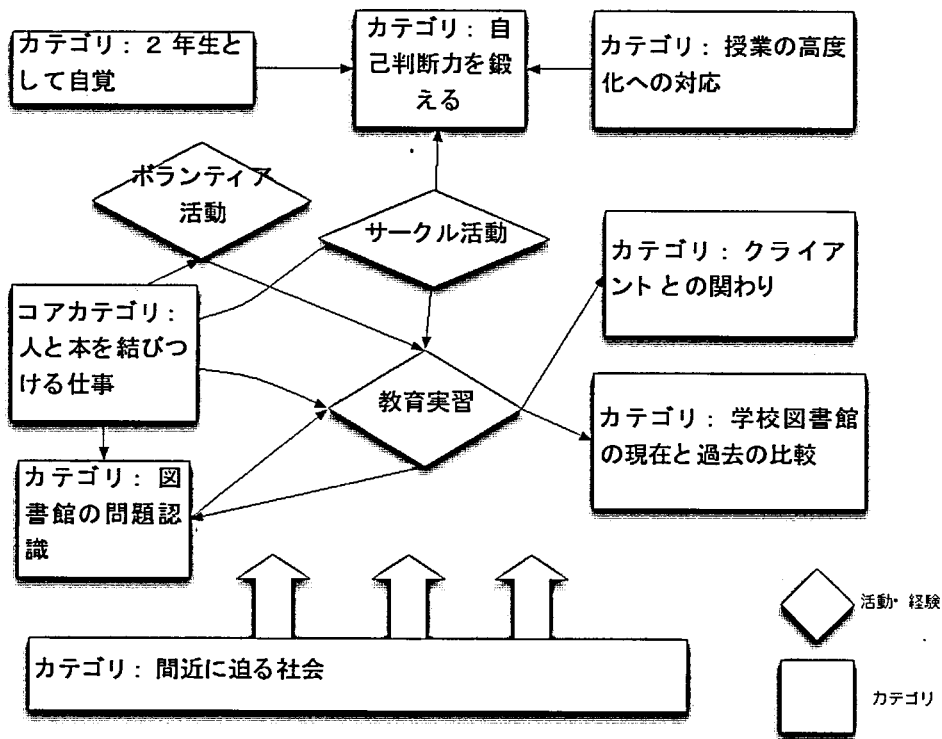
(2) 終わりに

司書課程では図書館実習が職業選択に積極的な影響を与えることが分かっている。¹¹いわば現場経験が「正」の影響を与えることが多いのが特徴である。今回の調査でもそれがまた違う形で証明された。2年次4月から開始した読み聞かせボランティアを実践するなかで、本と人を結びつけるという仕事の難しさを十分に理解し、5月と8月の教育実習に参加している。実習先の中学校ではその問題意識を持って図書館活動や読書推進活動を観察し、問題点や優れた点を把握している。2つの現場体験が司書という職業への理解を進めていることは確かなようである。また、学習活動やサークル活動において、教員に頼らず、自ら考えて様々な判断を下そうとしている。様々な葛藤があるがそれを受け入れている。本人たちは無意識にはあるが、学生から社会人として独立していこうとする行動を確認することができた。

前回のインタビューは2011年3月だったが、この2名の学生は半年の間に急速に職業的な社会化を遂げたと言えるだろう。

しかしインタビューイが2名だったので、今回得られた知見を一般化することは尚早である。GTAでは理論的な飽和状態に至るまで調査研究をしなければならないとされている。仮説としてこの傾向が他の司書課程の学生に見いだすことができるのか、今後の調査研究課題としたい。

図1 カテゴリー関連図



第2節 ブライダル

(1) カテゴリー関連図

カテゴリーの関連を表したものが図2である。

これまでに経験したインターンシップや専門課程の授業、就職活動により、ブライダル専門職の職業理解が深化することで仕事の特性を理解し、専門職の価値や態度を内面化できた学生がいる一方、専門職の問題を認識して諦めてしまう学生もいた。このことから、カテゴリ「ブライダル専門職の職業理解の深化（仕事の特性）」、「ブライダル専門職の問題認識」、「就職活動で身近になった社会」は相互に作用しているものと思われる。

1年次は、インターンシップで現場に出て、仕事の難しさ、厳しさを身にしみて感じ、価値や態度を取り入れるのではなく諦めにつながっていた。しかし、ブライダルコーディネーターを諦めはするものの、同じブライダル産業の中の他の職種にも視野を広げて考えるようになっていた。ところが、2年次前期が終了した時点では、就職活動による挫折やキャリアコンサルタントのアドバイスによる進路先変更でブライダル専門職全般を諦め、異業種にまで視野を拡大し内定を得てしまう学生が出てしまった。第1報でも「就職活動による視野の拡大」を示唆していたが、本論文では、それを裏付けることとなった。

さまざまな環境に影響されながらの就職活動では、就職活動によって進路変更を余儀なくされたり、自信をなくし諦めたりする学生の姿を通して進路指導の課題が浮かび上がった。カテ

ゴリ「環境に影響されやすい短期大学生」は「就職活動で身近になった社会」と相互に作用し、それぞれのカテゴリから「進路指導の課題」につながっている。

自分自身の将来像を見失った中での環境の変化や周囲の人からのアドバイスが及ぼす影響は大きい。職業の社会化が思うように進んでいない学生に対するキャリアコンサルティングは注意が必要であろう。本人が納得できない進路は大きな危険を孕んでいると言える。

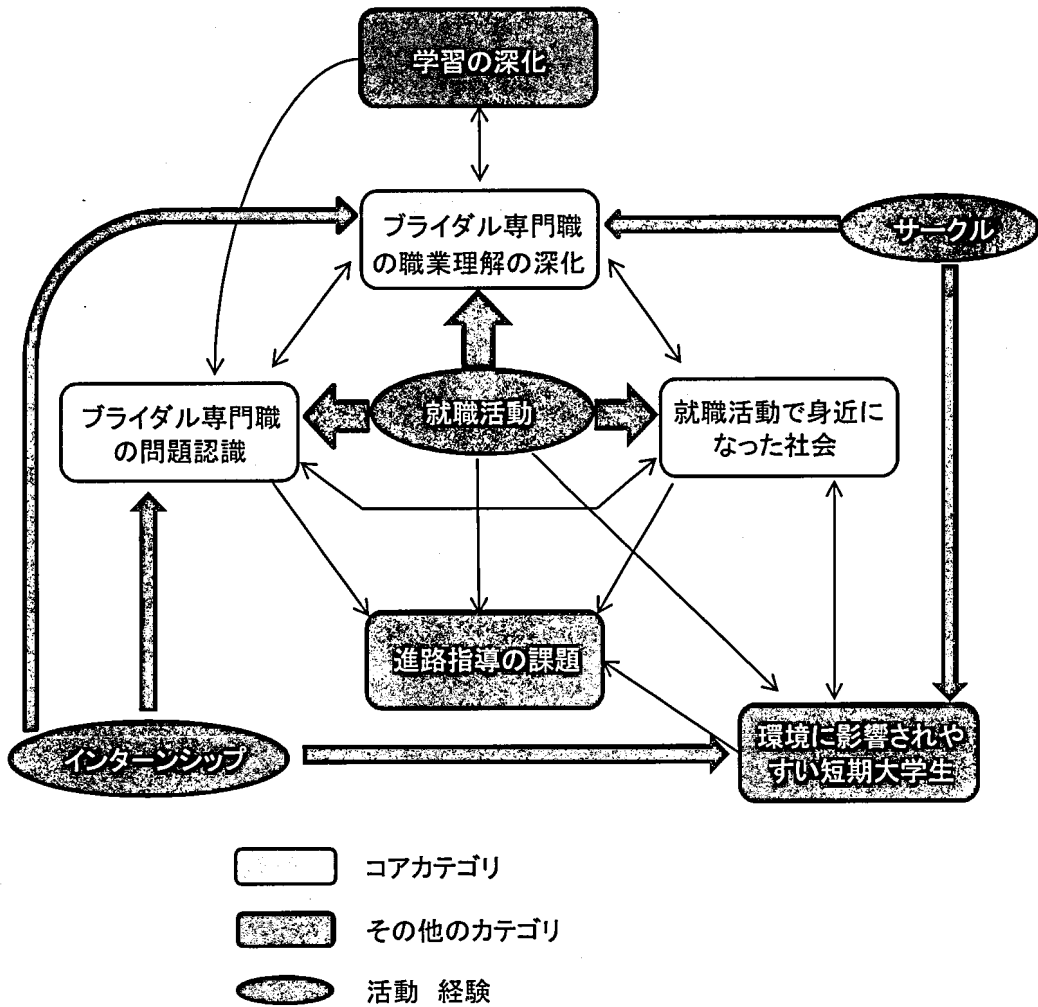


図 2 カテゴリ関係図

(2) おわりに

学生4人の質的データからブライダル専門課程学生全体の傾向を描きだすには限界があると感じている。本論文で示したカテゴリの関連表から、学生の進路指導からの影響が窺える結果となったことから、今後は就職セミナーにほとんど出席をしなかった、またはキャリアコンサ

ルタントに影響を受けていない学生との比較をしてみる必要があるであろう。しかし、ブライダル専門職を諦めてしまう学生のつまづきを発見し、就職活動を通して揺れ動きながら成長する中での社会化の課程を知ることができた。第1報では、就職活動による視野の拡大が確認されるに留まっていたが、今回は、就職活動が社会化に強い影響を及ぼしていることが確認された。

全体のまとめと今後の展望

今回の調査ではブライダル、司書課程学生の類似点も見いだされている。例えば「社会」が近づいていることを認識するカテゴリが見いだされている（カテゴリ：就職活動によって身近になった社会、カテゴリ：間近に迫る社会）。また進路指導の影響、就職機会の少なさについても共通している。

相違点としては実務体験（インターンシップ、実習など）の影響がブライダルでは「負」に、司書では「正」に働いていることである。教育課程の違いなどが理由として推測されるが、詳細は今後明らかにして行きたい。

今後は卒業前にインタビューを再度実施し、最終的なまとめを行う予定である。最後にインタビュー調査に応じてくれた学生の皆さんに心から感謝申し上げます。（了）

ⁱ木内公一郎、増田榮美「短期大学生の職業意識の変化-ブライダル専門学生と司書課程学生の比較研究-(第一報)」観光文化研究所所報 第9号(2011) pp1-25

ⁱⁱ木内公一郎「上田女子短期大学における図書館実習：職業意識の形成と進路選択」観光文化研究所所報 第4/5号(2007) pp54-79